

樺太盲啞学校調査中間報告

—残された史料と証言のなかから—

中根 伸一
札幌聾史研究会



1) はじめに

私たち札幌聾史研究会がこれまで取り組んできた聞き取り調査活動の過程で、樺太盲啞学校に在籍したことのあるろうあ者と出会い、かつて日本領であった樺太（今のロシア連邦サハリン州）で、聾児の教育に情熱を燃やした教師たちの存在を知りました。そこでこれを裏付ける資料や関係者の存在の調査に着手しはじめました。

まず、樺太盲啞学校の関係者や、ソビエトの占領による学校消滅で中途退学やむなきに至ったろうあ者たちの行方を追跡調査しました。その結果、北海道には、把握しただけでも7人、道外には広島県に2人、大阪府に2人、岡山県に1人、栃木県に1人、千葉県に1人の存在が判明しましたが、中にはすでに亡くなられた人もおり、存命していると思われるろうあ者は6、7人しかいませんでした。

樺太からの引き揚げ以来、58年以上の歳月が過ぎ去ったことで、調査対象者の絞り込みが難しく、高齢化による記憶のあいまいさもあって、この調査は困難を極めました。

特に、調査対象者が全国に散在しているため、札幌聾史研究会の自力調査には限界がありました。そこで、樺太盲啞学校の存在に関心を持ち、研究している方たちの協力を求める「調査ネットワーク」をつくりました。

この調査ネットワークの当初は、近畿聾史研究グループの新谷嘉浩氏と愛知聾史倶楽部の桜井強氏の2人が加わり、樺太現地調査団を結成した後は、新たに北海道立文書館勤務の一色秀和氏や北海道立旭川聾学校教職員の山根昭治氏、さらに近畿聾史研究グループの小枝豊氏が加わり、サハリン州のユジノサハリンスク

（旧樺太・豊原市）へ現地調査を行ないました。その後、引き続き調査と意見交換を行ないながら、全体の輪郭が少しずつ解明されるところまでこぎ付けることができました。

ここに共同研究者たちや札幌聾史研究会会員をはじめ、情報を提供して頂いた関係者たちの暖かいご支援に心からお礼申し上げます。

札幌聾史研究会にとってこの種の広域的な共同研究のネットワークは、今までにない新たな試みであり、こういう形の活動が調査研究の深化をうながし、メーリングリストでの情報交換によって埋もれた聾史の掘り起こしを可能ならしめたものと思います。

なお、樺太盲啞学校調査に関する報告は、それぞれの研究者からすでに発表されており、特に近畿聾史研究グループは「幻の樺太盲啞学校～三上キミエさんの聞き取り調査から～」を新谷嘉浩氏と桜井強氏の共同研究で発表されたことを付け加えておきます。

2) 収集した関連資料の一覧表

この調査のために現在まで収集した資料を分野別に整理すると下記ようになります。

A) 発行した新聞記事から

- ・樺太日日新聞5ヶ所・聾啞月報4ヶ所

B) 聾啞教育関係資料から

- ・全国聾啞学校職員名簿（日本聾啞教育会）
昭和14年度～16年度
- ・全国聾学校手話口話生徒状況調査（同上）
- ・東京聾啞学校卒業生一覧表 2ヶ所
- ・東京教育大学附属聾学校の教育
—その百年の歴史—
- ・北海道立小樽聾学校資料綴

・盲聾教育 80 年史 文部省 昭和 56 年

C) 聾啞運動関係資料から

- ・聾啞年鑑「聾啞界人名録」昭和 10 年
- ・生きて愛して一もうひとつのヒロシマー
- ・聾啞の光 教育号 昭和 17 年

D) 樺太関連資料から

- ・北海道樺太人名録「北海道新聞社」
昭和 19 年
- ・樺太教育発達史 高田銀次郎著
- ・大衆人事録第 14 巻 昭和 18 年
帝国秘密探偵社刊
- ・藤川実践女学校同窓会誌「実女」
- ・戦前の樺太の概況 北海道 昭和 37 年
- ・「望郷」樺太豊原史 中尾重一
- ・「樺太沿革・行政史」 社団法人樺太連盟
- ・旧樺太守備隊衛戍病院 樺太写真集

E) 豊原市街地図関係

- ・大日本職業明細図 第 550 号 樺太編
- ・豊原市街地図・商工人名総覧国書刊行会
- ・カラー地図 3 枚、その他 2 枚

F) その他

- ・藤川マキエ関係書類綴
- ・日蓮宗北海道大鑑
- ・新旭川市史 第 8 巻
- ・日本聾史学会論文集「樺太豊原盲啞学校」
中間報告 道産子歴史チーム

G) 証言者及び資料協力者

- ・樺太盲啞学校元教師
泉アイ（旧姓中の目）氏（札幌在住 85 才）
- ・同校中退者及びその家族 8 人
（広島県 2 人、札幌市 4 人、旭川市 1 人
新得町 1 人）
- ・池田裕子氏
（北海道大学教育学研究科博士後期課程）
- ・井潤裕氏の HP
「建築リスト・豊原支庁豊栄郡編」

3) 史料と証言をもとにした沿革史

これらの史料と証言の範囲で整理した樺太盲啞学校の沿革史は以下の通りになります。

年	事 項
昭和 6 年 5 月 1 日	樺太盲啞学校創設 太田勝馬校長を命ず（履歴書）
昭和 6 年 6 月 17 日	「豊原盲啞学院入学式挙行 入学者十名」 (樺太日日新聞)
昭和 8 年 4 月 28 日	「経営難と戦ひ涙ぐましき努力 豊原町私立盲啞学院」 (樺太日日新聞)
昭和 8 年 6 月 20 日	「豊原盲啞学院基金造成映画 会恵須取町で」 (樺太日日新聞)
昭和 9 年 4 月 17 日	「豊原盲啞学院樺太庁移管目 下具体策を研究」 文中「中田新平個人経営の豊 原盲啞学院・・・」 また「中田院主」とあり (樺太日日新聞)
昭和 10 年 1 月 10 日	太田勝馬 樺太庁より公立私 立盲学校及聾学校初等部教員 認可
昭和 10 年	聾啞年鑑に記載あり 「豊原盲啞学院（私）」豊原区 劃（画）外 元衛戍病院跡
昭和 11 年 4 月 1 日	証言者泉アイ（旧姓中ノ目）が 藤川実践女学校を卒業し豊原 盲啞学院の裁縫科教員に就任。
昭和 12 年 4 月	証言者故平沼正一郎が初等部 入学
昭和 12 年夏	貝塚村（大泊附近）へ海水浴（写 真）
昭和 14 年 4 月	証言者村川健雄（けんお）、初 等部入学
昭和 14 年夏	全校遠足会を行なう。鈴谷山？ （写真）
昭和 14 年 8 月 6 日	豊原盲啞学院を「私立樺太盲啞 学校」に改称 樺太庁告示第 249 号にて認可
昭和 14 年 5 月 1 日	日本聾啞教育会に記載「樺太盲 啞学校 樺太豊原一線番外地 東二号、校長 太田勝馬
昭和 15 年 1 月	教員泉アイが出産のために退 職（証言）
昭和 15 年 6 月 1 日	日本聾啞教育会に記載あり 「教職員名簿」
昭和 15 年 7 月 10 日	太田勝馬 口話教育功勞者で勤続十年以 上の対象者として感謝状受彰 （聾口話教育第一六巻第 7 号）
昭和 16 年 1 月 8 日	太田勝馬 樺太庁より公立私 立盲学校及聾学校訓導認可（履 歴書）

昭和16年4月1日	太田勝馬校長東京聾啞学校へ入学（履歴書）東京聾啞学校入学者名簿に記載あり 「師範科普通乙種、太田勝馬」証言者金丸道明氏が初等部入学（?）
昭和16年8月10日	日本聾啞教育会に記載あり 「教職員名簿」
昭和17年3月31日	太田勝馬校長 東京聾啞学校師範科を卒業する。 東京聾啞学校一覧表の記載は「昭和17年3月卒業 太田勝馬 権太 権太盲啞学校」
昭和17年4月1日	太田勝馬が復職する。権太盲啞学校訓導兼教諭を命ずる。（履歴書） 証言者三上キミエ氏と岡田宮子氏兩人とも旧姓は「畝（うね）」初等部入学。
昭和18年	証言者村川健雄が中途退学し札幌聾話学校へ転校。
昭和19年3月31日	権太盲啞学校閉校 太田勝馬退職（履歴書） 証言者三上キミエ、岡田宮子が中途退学。
昭和19年4月1日	権太恩賜財団権太聾啞学校開設 太田勝馬教諭を命ずる（履歴書）
昭和19年9月30日	太田勝馬 同校を退職する（履歴書）

なお、権太恩賜財団権太聾啞学校の消滅に関する記述が見られましたが、日付を特定することはできませんでした。

4) 太田勝馬校長の経歴とその考証

太田勝馬校長の追跡調査で判明した事項は、下記のとおりです。

昭和人名録や自筆履歴書によれば、明治43年2月4日、旭川市に生まれ、旧制の北海道庁立旭川中学校へ進み、昭和4年3月に卒業しています。

そして、その年の4月に、旭川市から少し離れた当麻村字園別（うえんべつ）尋常小学校の代用教員として奉職。翌昭和5年に退職して、旭川盲啞学校の教員になり、1年後の昭和6年4月30日に退職して、「昭和6年5月1日、権太豊原市に権太盲啞学校創設、校長を命ず」となっています。

しかし、北海道立旭川聾学校の旧教職員名簿には、太田勝馬の在職した記録が見当たりませんでした。

昭和5年に聾啞教育の関わりを持ってからわずか1年間で、権太で聾啞教育事業を起し、校長に就任したのはなぜだろうか。聾啞教育に関する指導内容・方法を習得するためには、たった1年間の実習では無理であろう。そうした無謀と思える計画が敢行出来たのは当時の時代背景との関わりがあると考えられます。

そのころの日本国内は、昭和大恐慌が吹き荒れ、政府が国策のひとつとして「いざ！満蒙へ」というスローガンのもとに青年たちの国外雄飛を鼓舞していました。また、権太移住の奨励もその一部であったなか、23才の青年であった太田勝馬もその夢に飛びついた1人ではなかっただろうか。盲啞学校で教師として勤務した泉アイ氏（旧名中ノ目アイ）の証言によれば、当時は、「大学は出たけれど」という就職難で、生家である権太落合町（今のドリンスク）の山奥の集落には、大学卒の牧夫が何人か働いていたような状況があったとのことでした。

また権太盲啞学院の個人経営者であったという中田新平氏（*1）の存在を無視することができないと思われます。中田新平という人物は、太田勝馬より4才年長で、同じ旧制旭川中学校の出身者でありました。日本大学を経て北海日日新聞社社会部に就職し、そのあと旭川託児所「愛児園」の主事を勤めた後、昭和5年に太田勝馬と共に権太へ渡ったことになっています。

中田新平は、前記の経歴で示している通り、社会事業の知識は、太田勝馬より長けていたようで、学校の創設手続きや運営、資金調達は一手に引き受けていただろうと考えられます。

さらに、のちに権太盲啞学院の校舎となった権太守備隊兵舎群（*2）を管理していたと思われる権太庁が跡地活用のために払い下げを行なったことが、こうしたろうあ者教育の場の設置を容易ならしめた一因であろうと考慮できます。

太田勝馬は、教員資格を持っていなかったが、聾啞学校教員の資格を求めて転々としていたことがわかります。

豊原盲啞学院を創設してから4年後の昭和10年に、ようやく権太庁から公立私立盲学校及聾学校初等部教員認可を受けています。もともと、当時の外地においては、教員免許状の有無は問われなかったのかもしれない。しかし中田新平氏が何らかの事情で満州へ渡って行った時期と重なっていたことを考慮すると、必要に迫られて教員免許状を取得したのではないかと推察するこ

とができます。

太田勝馬はその後、訓導の資格を取り、さらに聾啞教育の専門知識を取得するために官立東京聾啞学校師範科へ遊学(昭和16年4月～17年3月)しています。樺太へ渡った当時とはとにかく、外地へ雄飛することが先決問題で、そのための必要な資格や知識はあと廻しにしたような部分が太田勝馬の自筆履歴書から見受けられます。

泉アイ氏の証言によれば、その裏付けとなる部分がありました。

曰く、太田勝馬先生が隣接している「藤川実践女学校」(*3)の経営者であった故藤川マキエ校長(*4)のところへ相談のためにひんばんに出入りしていたことです。相談内容は恐らく学校経営や教育方法について教を乞いに通っていたことだろう。昭和10年頃は、渡満した中田新平氏の方は彼が担い、学校経営も兼務する状況に苦悩していた時期であったかもしれません。

当時は、まだ藤川実践女学校の生徒であった泉アイ氏が、翌年、昭和11年3月に卒業した後、太田勝馬から紹介を依頼された藤川マキエ校長に乞われて、もう1人の教師、宮野明子と前後して同年四月から豊原盲啞学院の裁縫科教師として就職されました。

5) 樺太盲啞学校の所在地をめぐる考察

戦前の樺太豊原市に関する地図は、現在までに7枚見つけました。いずれも番地や公共施設が、日本語で当時のままに示してありました。昭和8年に作成の地図が最も古いもので、なかには、戦後、引揚げ者たちの記憶をたどって作成したものと思われる地図もありました。

これらの地図には、「樺太盲啞学校」の位置を記載しているものと社会事業の各種施設として列記したものとがあり、また、掲載なしの地図もありました。古い年代の地図の場合は、作成年月が示されていますが、引揚げ者たちの作成した地図は、残念なことに作成日が記載されていませんでした。

樺太盲啞学校の所在地を示す各種史料には次のように番地名が掲載されています。

- 1) 豊原市一線番外地東二号
(人名録)(日本聾啞教育会)他
- 2) 豊原市大字豊原字一線番外地東二号
(樺太庁告示認可)昭和14年8月

- 3) 豊原町東二条南三丁目
藤川実践女学校の跡に新設された豊原盲啞学園
(樺太日日新聞)昭和6年6月20日号
- 4) 藤川実践女学校の裏手・
昭和8年「聾啞月報」記事
- 5) 大字北豊原
「望郷」樺太豊原史 中尾重一
- 6) 東4条北2丁目
(大日本職業明細図 第550号 樺太編
昭和13年発行)

これらの記録を順に追って調べてみると、少なくとも3ヶ所に所在したと想定することができます。昭和19年に樺太恩賜財団に移管した「樺太聾啞学校」の所在地は史料には残されていませんが、引揚げ者たちの記憶をたどって作成した地図には、これまでとは違った位置に記載してありました。同様の地図が他にもう1枚あったので、あながち記載ミスとは言えないと思います。それらを整理してみると、以下のような移転先が考えられます。

創立当初(昭和6年6月から)

豊原市東二条南三丁目、藤川実践女学校が昭和3年、他所へ移転した跡地(法華寺跡)に新設。校名は豊原盲啞学園。

藤川実践女学校の移転先は一線番外地東二号に位置した旧守備隊衛戍病院棟であった。のちの番地表示は東3条北1丁目となる。

1回目の移転先(昭和8年から昭和19年閉校まで)

校名は、豊原盲啞学院⇒樺太盲啞学校。所在地は藤川実践女学校の裏手(聾啞月報記事)一線番外地東二号(聾啞教育会他)19年3月30日閉校(*4)

*地図1と*地図2と*地図3を参照

旧守備隊関連兵舎3軒からなる校舎

*証言による平面図参照

2回目の移転先(昭和19年4月から終戦まで)

樺太恩賜財団(理事長増本甲吉)が経営され、これまでの校名が聾啞者単独の樺太聾啞学校と改称。所在地は、真岡通りの北側を西へ2丁目隔てた各種社会事業団体が入居する建物に移転したと思われる。

新番地表示では、東一条北1丁目あたりに位置する。

*地図4と*地図5を参照

比較的歴史の浅い史料によれば、藤川実践女学校の所在地は東3条北1丁目と示されており、のちに区画

番地の変更があったと思われますが、旧番地で示された東二号は、必ずしも新番地の東二条に当たるとは限らないと考えます。東二号と東二条の位置が混同したために所在地確定に多くの時間を要しましたが、現地調査の目測をもとに、泉アイ氏の証言と藤川実践女学校同窓会誌に掲載した校舎の写真、又は藤川マキエ氏の自筆履歴書の史料を検討して、所在地の確定がほぼ固まったと思います。

6) 閉校そして移管、その後の太田勝馬

昭和16年、太田勝馬が官立東京聾唖学校師範科へ入学し、卒業するまでの1年間は樺太盲唖学校を「在籍休職」しています。その間の管理又は、教育がどうなっていたかは、史料に残されておらず状況が把握できませんでした。

復職の際に拝命したとなっている「訓導兼教諭に命ずる」と履歴書に記載された部分は何を意味しているだろうか。別の史料には同じ時期に「太田勝馬校長」と記載されてあって、両説が見られますが、経営者は留守中から別人になっていたと思われる節が見られません。

2年後、樺太盲唖学校が軍部の校舎接収による立ち退きのために閉鎖されて退職し、樺太恩賜財団が経営する「樺太聾唖学校」へ改めて「教諭を命ずる」となっています。校長職または訓導から格下げされたが、わずか6ヶ月で辞職しました。

その理由については、当時の人たちの証言によれば、自身の金銭的な問題と家庭的な問題を抱えていたという。それが辞職の一因であったかもしれませんが、樺太地域における戦時中の統制や生徒の家族たちが内地へ引揚げるなどの中退、生徒減少、学級閉鎖に見舞われた背景が、退職のやむなきに至った大きな理由ではないかと考えられます。

もうひとつは、樺太恩賜財団の存在ですが、理事長は豊原市に関する各種団体の長に名を連ねている著名人でありました。どういういきさつで聾唖学校の経営を引き受けたかについては、その実情が把握できませんでした。

その後の太田勝馬は、樺太陸上小運搬業統制組合に入社し、1年後の昭和20年11月に王子製紙会社豊原工場へ入社しました。翌年7月に「完了」され、その年の11月に行なわれた第2次引揚げ船(*6)で函館

へ帰還しました。そして江別の引揚げ者住宅に身を寄せ、北海道庁の引揚げ者対策によって、白石村（のちに札幌市へ編入）立白石小学校助教諭として勤務しました。1年後「願に依り退職を命ずる」を受けて、その年に北海道立小樽聾学校の教職を得て就職しました。そこも又、わずか1年で「退職願」を提出し、昭和24年6月13日に受理した記録が残されています。

これまでの太田勝馬の経歴は、樺太盲唖学校に在職した期間を除くとおよそ1年刻みの転職を繰り返しています。ろう児教育に大きな夢を抱いて未知の樺太へ渡り、夢破れて帰還した1人の聾教師の姿は、何を物語っているだろうか。

太田勝馬は、その後、東京都立足立聾学校の教頭職を最後に定年退職した記録が見つかったので、追跡調査を行ないましたが、時すでに遅く十数年前に逝去されました。調査団の知人を介して、かつての同僚を通じて家族に取材を申し入れるつもりでしたが、複雑な家庭事情などがあるというご助言で取材を断念せざるを得なくなりました。

また、残念なことに生前の太田勝馬は樺太時代のことはあまり語らなかつたらしく、書き留めた記録も残っていなかったようです。

今は異国の地になっている厳寒の北辺の地で短かった14年間の校史が記録されることなく露の如くに消滅しかけていますが、高齢になりつつある存命者たちのためにも、記録を後世へ残しておかなければならないと思います。

7) 終わりに

私たちの樺太調査団は、平成16年7月に現地調査を行なうために組織されたものでした。初めは派遣日程の調整、連絡が主でありましたが、参加希望者が増えるにつれて次第に具体的な調査内容の議論や史料の交換などに発展しました。

従って、急造の調査団であったため、各々の情報量の違いによる食い違いが見られましたが、調査に先立って作成した資料集を配布し、現地調査以降は、活発な意見交換と情報収集の量が増えていきました。その後、当時の教職員で唯一の存命者であった泉アイ氏の聞き取り調査が実現し、太田勝馬が在籍した北海道小樽聾学校と戦後に藤川マキエが創設したわかふじ寮でそれぞれ両名の履歴書が発見できたことは、これまで

の調査団の仮説、推測などの議論から教示され、調査範囲を広げた結果であったと思います。

残された調査研究の課題は、在校生名簿や盲啞学校全景写真の調査及び未調査者に対する聞き取り、盲啞学校と称しながら盲者がひとりもいなかった理由や口話法教育が中心であったことなどの指導内容・方法の検討、生徒数の推移、経営主体や経営状況の未解明な部分が山積みされています。また、戦前の異常な時代に置かれていた北辺の地に聾啞教育を開拓したという史実と社会的な背景から分析した記録などは調査団のなかから分野別の研究が新たに掘り起こされることを期待してこの報告を終えます。

*** 1)** 明治 39 年北海道出生。昭和 2 年日大を卒業し、北海日日社会部、旭川市託児所愛児園主事など歴勤。昭和 11 年満州ハルビン日日新聞勤務。のちに克山商工会常務理事。(大衆人事録 昭和 18 年・零国秘密探偵社刊より転載)

*** 2)** 明治 38 年日本が樺太南半を領有すると共に樺太守備隊を設置し、明治 40 年豊原市に移転した。明治 43 年ポーツマス講和条約批准による守備隊撤退を開始。大正 2 年 5 月に完了したが、大正 9 年に尼港事件により再び駐屯。大正 14 年日露間新協定の成立で守備隊が廃止し撤収したため、残った守備隊敷地内の兵舎群は樺太庁へ移管され各種学校や児童などの社会事業施設として払い下げた。

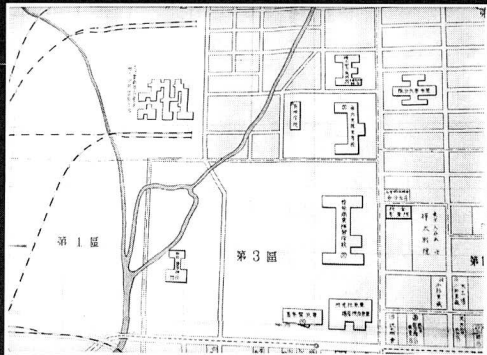
*** 3)** 大正 15 年 9 月 10 日、樺太豊原市内に開校。「我国女子教育の根本方針たる良妻賢母主義に則り家庭生活における条件として須要なる実務を教育し、良妻賢母における婦徳を涵養するの目的を以て・」樺太教育発達史(高田銀次郎著)

*** 4)** 明治 33 年香川県にて出生。前述*3)の私立藤川実践女学校を創立し校長に就任。戦後、北海道新得町で聾啞者授産所、福祉法人厚生協会わかふじ寮を設立し、初代寮長及び施設長になり、故田中皎一氏(元社団法人北海道聾啞連盟長)と共にろうあ者の社会復帰に尽力。勲五等瑞宝章授与、社会福祉功労者厚生大臣表彰、新得町名誉町民称号授与、財団法人全日本聾啞連盟厚生文化賞授与。昭和 60 年逝去 享年 89 才。

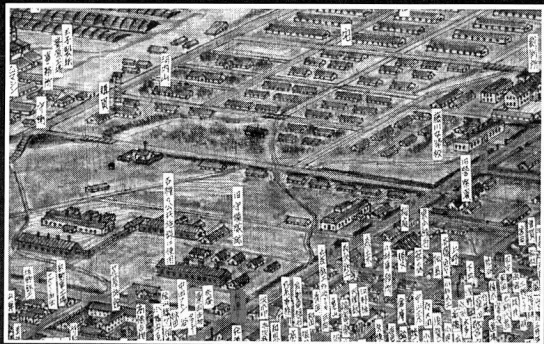
*** 5)** 閉校に関連する事項は、藤川マキエ氏の自筆履歴書によれば、「昭和 19 年 3 月 30 日全校舎を軍部に献納」。さらに文中、「軍部に要求せられ、ここに進んで・」の記述あり。この地に移転した昭和 3 年の記述には豊原聾啞学院の所在地も含む「東 3 条北 1, 2 丁目の払い下げを受く」とあり、藤川実践女学校と隣接する同じ敷地内の樺太盲啞学校は東 3 条北 2 丁目に位置しており、同時期の軍部接收のために共に閉校せられたという憶測が成り立つ。しかし閉校の背景には諸論があり実情は定かでない。当時の国家総動員法の下、校舎接收は政治的に優先せられたものと思われるが、北満を含む樺太は「日ソ不可侵条約」で守られており、昭和 19 年に軍備強化するような状況ではなかったという意見と、仮説だが、藤川実践女学校の自由活達な校風に当局から睨まれたことが学校閉鎖に追いやられたかもしれないという意見もあり。しかし、旧守備隊基地の真岡通り(現サハリンスカヤ通り)に面した斜め向いに樺太憲兵分隊本部(東 4 条南 1 丁目)があって、その分隊の宿舎が何らかの事情に迫られて校舎のあった基地の東半分一帯が接收されたという見方が一致している。

*** 6)** 昭和 21 年「樺太引揚げに関する米ソ協定」が成立し、南樺太から引揚げを開始し、昭和 26 年の第五次までおよそ 35 万 9 千人が帰国した。

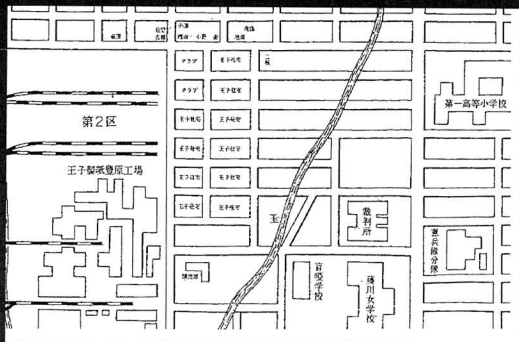
※ 地図その1 榑太盲啞学校付近



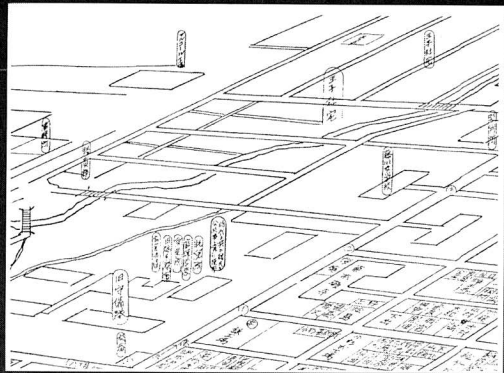
※ 地図その4 榑太盲啞学校付近



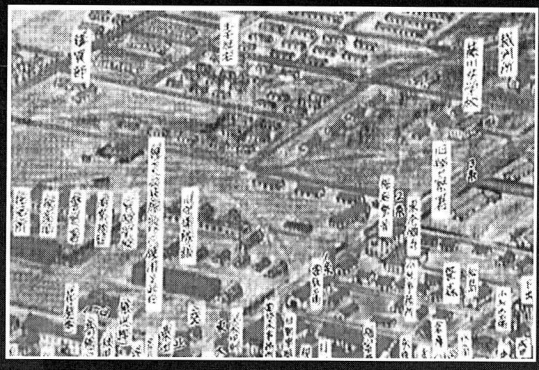
※ 地図その2 榑太盲啞学校付近



※ 地図その5 榑太盲啞学校付近



※ 地図その3 榑太盲啞学校付近



真岡通り (現サハリンスカヤ通り)



正面玄関

藤川実践女学校 寄宿舍
(旧衛戍病院棟)

謹慎室

藤川実践女学校 校舎

講堂

榑太盲啞学校
寄宿舍

校長

村上宅

榑太盲啞学校
校舎



右の平面図は、泉アイ氏と村川健雄氏の証言を元に作成したもの。